児童読み物と自己状況

岩田二郎

え・石黒清

私たちは、一九四〇年代の児童読み物について語り合っていた。渋谷の駅前広場がみえるある喫茶店のあかるいウインドウごしに四・二九の祭日の人波を見ていたのだと思う。

山川惣治は、『少年王者』を発表するときの「思い」などを語りながら、戦中～敗戦直後にかけての児童読み物のようすにふれて、かなり饒舌だった。戦中、あるいは一九三〇年代後半をふくむ時代の児童読み物は、それが児童文学というカッコでくくられてきたものと明確に峻別されうるかぎりにおいて、みせかけの良心的「児童文学」よりはるかに状況を反映していたといえる。むろん、それは日本軍国主義が要請する「戦意高揚」と「愛国意識」の貫徹をきわめて直截的な表現によって補完したものであった。

だが私はいま、なにも戦中の児童読み物が状況の産物であるからといった理由で称揚したいわけではない。もんだいは、「状況」に追随することか、「状況」の内部にみずからを存在させ、さらに「状況」の真面目を[illegible]ための方法論になりうるのかどうか、ということなのだ。たとえば私たちはいま、今日の状況参加が行動というスタイル以外にありうべきはずのないことを熟知している。だが、同時にその行動自体の物理的な衝撃力でさえもが状況を質的に変容させうる衝撃力とはなりえないという陥落せるペシミスティックな状況に現に私たちはいるわけである。そこでは行動への参加も不参加も、多人数による連帯者も孤絶した自己闘争者も、ひとしなみにある苦痛をその心情の深部にかかえこみながら、じつは「状況」外にあるしかない自己存在と堕落した時代との相対的関係を、具体的には疎外感として確認していなければならない。このような、いわばはてしなき暗澹を保続させた思想なり精神なりが、闇にひびく敗残した総括集会の演説をとりまく一般大衆にとってついに無縁でありつづけねばならないという普遍的な関係はいまも重たく存在しているのだ。

そのときも私は、山川惣治にバカげた設問を試みた。「ノックアウトQ」にしても、「少年王者」にしても、「バーバリアン」にしても、戦前昭和のトータルな庶民感性があったり、日本人が外地で行動せざるをえないインターナショナリズムがあったり、敗戦の日から物語が始まるなど、庶民大衆である読者はつねにあるたしかな実感を密着させることができたが、山川さんの内部に意識的なものがありましたか」と。もちろん、この事大主義的な挑発は、かれの前では無力であり、まったく意味のない反応によって報復されなければならなかった。

四・二九の祭日の真昼と四・二八の夜とが同じ場所をみつめながら、私には状況外にある自己状況をついに認知しえずに大量に生みだされる今日の児童文化の退廃について、この「少年王者」の作者に八つ当りしないわけにはいかなかったのである。今日の児童文化は無状況なテクノロジーだけなった、と。

冒頭で「四・二九の人波を見ていたのだと思う」と思ったのは、四・二八沖縄デーの夜と同じ場所をみつめていたわけでもなければ、「少年王者」の作者が非状況性に意識を遡行させていたわけでもなかった。その一見非状況的な状況外認識の根元にこそ山川惣治が状況への参加をめざして出撃していた精神の屹立をわずかにではあったが垣間見たような気がしたからであった。

吉本隆明という一人の子供をも注目確認するまでもなく、現在私たちは、「戦争」と「平和」ということばのもつ意味をそのまま知覚できるようなオプティミズムをきった喪失している。「戦争態」と「平和態」の中間に苦悩に顔面をゆがめ一懸垂状態をつづけようとしているのでさえない。「戦争態」と「平和態」という状況からも見離されたばかりか、その二元の傾きさえも体験不能な地平を這いまわることを強いられている。そこでは、どちらのことばも同じ意味をしかもたない。「戦争」は「平和」と同義であり、「平和」は「戦争」と同義であるというふうに……といったような意味のことを私は山田警治に語り終えた。

政治的状況にかんするこのような分裂症的譫言にたいして、この「少年十者」の作者は、前日の四・二八沖縄デーの「暴力学生」の行動にふれて静かに首をふっていた。けれども「暴力学生」を支持しないからといって、私が単純にかれを批難することがここでのもんだいではない。渋谷の喫茶店で熱心に語られた児童読み物と状況との連関とその送り手の意識の位置を明確にしたいのである。それは、政治的状況とはけっして無縁ではありえないはずの児童文化の送り手の堕落について語ることであり、闇のなかに人垣をつくるもの言わぬ大衆でもある子どもたちとの距離が孕むもんだいを指摘することでもあるのだ。この関係は、現によく新宿駅西口でみかける学生たちとそれをとりまく一般大衆とのそれではなく、むしろ共産党や社会党に組織されたひとびとかれらの整然とした隊列を道路の両側でまことに興味ぶかそうに見守る一般大衆とのそれに同じだ。こっけいな状況認識によるあかるい未来革命への指向が、大衆に一定程度のみせかけの有効性を与えている図式がそれに当てはまるだろう。

なぜここで、とくに児童読み物の世界において、このことがもんだいになりうるのかという問いにたいしては、ひとつだけ明確な理由がある。当然のことであるが今日の日本の文化・芸術状況の投影として児童読み物もまた存在するにもかかわらず、そこにはいま、堕落した政治色をもった徒党の集団の圧倒的な力が席巻している。対抗するに、これまた低度の思想性をもつ卑小なセクトと愚かしい保守派烏合の衆ではもんだいにもならない。これは、とくに「児童文学」の世界で顕著だ。政治的であることが、じつは無政治的であるかもしれない今日の文化・芸術状況の退廃の一方の極には、つねに政治的状況に無自覚なくせにその無自覚さによって無意識に政治的状況にふかくかかわり超える、もの言わぬ大衆＝子どもが存在しているという事実を確認することで、かれらの社会的・文学的営為は破産する運命にあるはずなのだ。けれども私たちの眼前にひろがる政治的状況に無自覚にかかわりつつそれを撃つことのできる送り手は皆無にちかいことをいまは認めないわけにはゆかない。

貧しかった子ども時代に労働のさなかにひとりで空想の世界を構築することで遊びを保留することができた山川惣治が、なぜ戦後児童文学に誇るべき作品をのこしえたかは、いまかなり明白なのだ。「ノックアウトQ」のストレートの鋭さこそか山川惣治の「思い」をこめた状況へのカウンター・ブローであったことはいうまでもない。

'69年5月5日

日本忍法伝　第三部

新・日本書紀

第10回

作・佐々木守
え・岡本颯子

（一）

船は流れた

　船は潮にのって静かに流れた。
真暗な夜を船は男と女をのせて音もなく流れた。
　丸太をくりぬいた上に幅の広い板をうちつけ、そこにいくつかの櫂をおくへりが出ている。くり船の部分と舷側の板とは木のつるでぬいあわせてある。素朴な船だ。小さな船だ。漁に出るとき三人から五人でこの船をあやつるのだろう。
　もちろん豊媛はそんなことは知らない。豊媛はいま玉依彦の胸の中で幸せであった。かつてまだ奴国で少女だったころ、はじめて知った速瀬彦にいだいた気持とはいまは違う。
　考えてみれば、あのとき速瀬彦に対して抱いた気持はほんとに少女らしいおののきと甘さだけのものだったのかもしれない。
　しかし、いま玉依彦と一緒に、こうして小さなくり船にゆられながら、暗い海を流れていると、不思議な落ちつきを感じるのだ、それだけ大人になったのかしれない。いや、歳をとったのだ。
　おそらく、少女時代、共に遊んだ奴国の友達の多くのものはもう一人か、中には二人もの子どもの母親になっているにちがいない。
　だが、邪馬台国の「日輪」となった豊媛にはそれは許されない。男と抱きあうことも、そしてその男の子どもを生むことも。なぜなら彼女は「日輪」であるからだ。「神」であるからだ。「人間」であってはならないからだ。
　「おれの日輪……」
　玉依彦が豊媛の顔をみつめてつぶやいた。
　「日輪ではありません。トヨ、それだけの女です」
　そうだ、私は、玉依彦と船出をしたときから「神」であることを、「日輪」であることを捨てたのだ。それなのに、どうしてまだ私を日輪などと呼ぶのですか。
　とつぜん、玉依彦がほがらかに声高く笑う。
　「おれは、日輪を抱いている。日輪がおれの腕の中にいるぞ」
　叫ぶようにいうと、玉依彦は力を

こめて豊媛を強くしめつけた。

「うっ」

臭のつまるような苦しさは、陶酔にかわった。このまま、何もわからなくなって、海の底へ没んでしまってもいい。玉依彦と一緒ならば――。

玉依彦の腕が、そっと豊媛の下肢をひらいた。

一瞬、身をかたくしながら、それでも豊媛はそっと玉依彦のするままにまかせた。

ザザーッと波の音がふいに耳をついて、豊媛は自分のからだの中に玉依彦の男を感じている

気の遠くなるような恍惚感の中で、豊媛はそのとき、まだ見たこともない巨大な建物と巨大な船のまぼろしをまぶたの裏に描いていた。

それは玉依彦にきいた出雲の国にあるという「心の御柱」を中心とした、千木をいただく大社であり、そして天鳥船のイメージであった。

それらのイメージの上に豊媛はコオオオン、コオオオンと胸をゆすがるようなひびきを重ねて聞いていた。銅鐸のひびきであった。そのまぼろしの音と映像が一つになって豊媛の身体の中をぐるぐるまわった。

男のあつい精がそれにつれて、身体全体をかけめぐるような気がした。

「あっ」

そのとき、豊媛は思わずみじかい叫びをあげた。

なぜか！ 豊媛は瞬間、いま自分がみごもったような気がした。そんな気がするほどの充実感の中で、彼女は潮にのって流れる船のゆらめきと、玉依彦の男らしい抱擁の中で、次第に我を失っていった。

（二）

「離れないで」

声にならない声は、思いがけなく女の腕に強い力を与えて男を抱きしめさせた。

男は、かるく身をずらすと、それでも女のかたわらに、あらためて横になった。

二人の顔の真上に満天の星があった。

星は、ときどき見えたり、かくれたりした。

暗くてよくはわからないが、雲が流れているにちがいなかった。それも、かなり早く流れているのだ。

男は、女の長い髪の毛を指でまさぐった。

その指の感触に、女はふたたび、身体の中からものうい疲労感と、それにまさるうねりが生れてくるのを感じつつ、しかし小さくささやくように男にいった。

「出雲の話をしてください」

「出雲の？」

「そう、出雲の……」

「出雲は……」

いいかけて男はことばをとめた。

「どうして話してくれないの」

「見ればいい、その目で」

「……」

「お前の、その目で、見ればいい」
「でも、その前に話して下さい」
「無茶をいうな」
「無茶?」
「そうだ、出雲国のことは語れない」
「どうしてですか」
「出雲は、おれのとぼしい言葉では語ることができない。もし、おれが何かを言ったとしても、その言葉と言葉の間から、本当の出雲がスルリスルリと、まるでつたで編んだかごで水をくむように流れおちてしまう」
「そんなに出雲って美しいの?」
「ああ、出雲は美しい」
「そんなに出雲は大きいの」
「ああ、出雲は大きい」
「そんなに出雲は哀しいの」
「ああ、出雲は哀しい」
「そんなに出雲は……」
「出雲は生きている。海のように、山のように、そして本ものの日輪のように」
「ああっ」
それは、豊媛の口からもれた吐息であった。豊媛はこういいたかったのだ。出雲ってまるで玉依彦みたい……と。
「急ごう!」
急に玉依彦はぱっと身を起した。
豊媛はそっと目をつぶる。
私はいま、「出雲」といっしょに生きている……。
が、その甘い思いは、とつぜんの玉依彦の声に破られた!
「起きろ!」
声ははげしくきびしかった。
「邪馬台国の奴らが迫って来たぞ!」
豊媛ははっと身を起した。
そして見た!
海の上に点々とつづく青白い火を。
それは水平線の上に幾十、幾百とも知れず並んでいた。
時にははなれ、時には近づき、かがり火の如きそれは、瞳をこらせばこらすほど、見る見るこちらへ近づいてくるように見えた。
「こげ! おれと一緒にこげ! まこと邪馬台国の日輪であることをやめ、おれと出雲へいくつもりならば、腕のおれるまでこげ!」
そういう玉依彦はすでに擢を手に、満身の力で火の群れからのがれようとこぎつづけていた。
豊媛もかいの一つをにぎった。
にげるのだ!
邪馬台国からにげるのだ。
日輪であることから、神であることからにげるのだ!
まだ見ぬ出雲のために!
トヨという名の女であることをこの手につかむために!
こいだ! 腕がおれ、身体が裂けるほどにこいだ!
がしかし! 迫りくる火の群から、ようやく遠ざかったと思ったとき、豊媛と玉依彦はほとんど同時に絶望の声をあげた。

何ということだ！ 彼がこいで進んだ、その前方の闇から、ぬっ、ぬっ、ぬっ 幾そうもの舟があらわれたではないか！

「日輪だ！」

「日輪がいたぞ！」

奈美彦や速瀬彦の声が聞こえる。

豊媛は、今は櫂をもつ力もなく玉依彦をみつめた。

玉依彦は、暗い目でじっと沖をみていた。

あの無数の火はまだ、同じように波の上にゆれていた。

不知火……。

その火に追われて、何ということだ、せっかくにげて来た邪馬台国へまた我々は帰って来てしまった！

「日輪！ 御無事か」

奈美彦の声がすぐ近くでした。

とたん、豊媛は、いきなり身をおどらせると暗い波間にとびこんだ。

水のつめたさを、こころよいと思ったのも束の間、そのまま豊媛の身体は深く深く没んでいくもののようであった。

（三）

輝く太陽が白い砂をより一層白く見せた。

昨夜の暗い海はどこへいったのか。白砂からつづく海は、いまあまりに明るい。いや、どぎつすぎるくらい青く美しい。

その砂浜に、男たちが穴を掘る。深く深く穴を掘る。

豊媛は、奈美彦や速瀬彦にしっかりとおさえつけられながら、その穴を凝視する。

いや、その穴のすぐ横に、ぐるぐるとしばられて立つ玉依彦をみているのだ。

昨夜、すばやく海にとびこんだ速瀬彦に助けられて、美夜日に身体をきよめられ、そしていまの豊媛は、頭にいらくさであんだ冠をかぶり、五色の糸で作られたたすきをかけさせられている。

首には、にぶく、しかし底深く輝くまが玉が、いくつもいくつもつながれた首かざりをつけ、そして帯には鏡が下っている。その鏡には鈴が五つついている。

それは日輪の正装であった。

ふたたび日輪にかえって、豊媛は、身動きもならぬほどの強い力でおさえられつつ、邪馬台国の人々の前に現れた。

穴が掘られた。

「聞け！ 邪馬台国の人よ」

奈美彦が、よくとおる、しかし、しわがれた声で叫んだ。

「邪馬台国の日輪を盗もうとした男が、いま地中にうづめられる、天よ、日輪よ、そして邪馬台の人々よ、我らの敵が今滅び去るのだ！」

声が終ると、男たちは、力一杯玉依彦を穴の中へつきおとした。

そのとき、豊媛は、玉依彦が叫んだように思った。

が、その声は聞えなかった。

だが、はっきりと見えた口の動きは、豊媛にこう玉依彦がいっているように告げた。

「トヨ！」と。

そう、私はトヨ、それだけの女。

涙がほほをつたって流れた。

もう何も見えなかった。

ただ、その中で、豊媛は昨夜のあの感覚だけをしっかりと抱きしめていた。

私は、玉依彦の子をみごもった！

私は、「出雲」の子をみごもったのだ！

（つづく）

執筆者
森本和夫
種村季弘
秋山　清
森　秀人
安田　武
小川　徹
石子順造
別役　実
野島秀勝
矢島　翠
吉本隆明

現代市民社会を侵蝕する性の風俗化をきびしく痛撃する
現代性テクノロジー批判!!

5月初刊　¥750

回想のゲバラ

大林文彦訳編
5月初刊　¥580

ナイーヴで人間的な、ラジカルで革命的なチェの人となりと、Fカストロ・金日成・ラウールロア・カーマイケル・インティペレド・トプレらによる、現代革命にチェの思想を継承発展させる重要な論文を収録。

唯一の原典全訳!!　6版売切れ！　増刷手配中

ゲバラの日記

地図5頁・写真40点
完全資料付
栗原人雄訳
粟津　潔　装幀
¥480

脱走兵の思想
―国家と軍隊への反逆―

小田　実
鈴木道彦　編
鶴見俊輔
粟津　潔　装幀
5月末発売　¥580

日本反戦詩集

秋山　清
伊藤信吉　編
岡本　潤
5月初発売　¥580

自筆・手刷り詩集をふくむ無慮1万点の詩から最もすぐれた作品を精選した初の反戦アンソロジー

世界反戦詩集　木島始編
7月発売

東京都千代田区西神田・石合ビル
TEL 291-9744・9752, 294-7083

太平出版社